

令和3年度
千葉大学先進科学プログラム入学者選考課題
課題論述
人間科学関連分野 方式Ⅱ
(9:30～11:00)

注意事項

1. 解答は、すべて別紙の解答用紙に記入すること。
2. 検査室に用意してある辞典を使用できます。
3. 携帯電話、スマートフォン等の電源を必ず切ってください。

以下の資料Ⅰおよび資料Ⅱは、どちらも「利己主義」というテーマに関するものである。これらの資料を読んで、続く問1～3に答えなさい。なお以下の「(中略)」は文章が途中省略されていることを表す。

資料Ⅰ

著作権上の理由により掲載できません。

(出典：片岡雅知「利己主義と利他主義」(太田紘史編『モラル・サイコロジー』、春秋社、2016年、pp.319-71)より一部抜粋)

資料Ⅱ

資料Ⅰの波線部(p.1)で述べられていたような研究は、実際に多くおこなわれてきた。一つの焦点となるのは、困っている人を助けるという一見利他的にみえる行為(援助行為)が、実際にどのような動機^(※)から生じるのかという問題である。一方では、そうした援助行為は、困っている人に共感しその人の苦痛を軽減したいという利他的な動機によって引き起こされる、という考え方がある。そしてこの立場では、利他的な動機は困っている相手への共感の程度が高いほど強まるとされる。しかし他方で、一見利他的にみえる援助行為も結局は利己的な動機によって引き起こされている、という考え方もある。この立場では、例えば「人の苦痛を軽減したい」という動機も、実際は自分自身の苦痛や苦悩(他者の苦しみを目の当たりにすることの不快感や、自分が助けなかった場合に予期される罪悪感や恥の感情など)を減らすという究極的動機のための中間的・手段的動機であるとされる。

以下は、援助行為は、困っている人への利他的動機によって生じる側面もあることを示すため、心理学者Batsonらがアメリカでおこなった実験を報告した論文に基づいて作成された実験概要である。この実験では、困っている人に共感しやすいかどうか、また困っている人から受ける自身の苦痛や苦悩から逃れることができる状況かどうかを変化させ、これら二つが援助行為に及ぼす影響を検討している。

(※)資料Ⅱにおける「動機」は、資料Ⅰでの「欲求」と同じ意味と考えてよい。

実験概要

著作権上の理由により掲載できません。

(出典：Batson C. D., Duncan B D., Ackerman P. Buckley T., and Birch K. (1981). Is Empathic Emotion a Source of Altruistic Motivation? *Journal of Personality and Social Psychology*, 40. 290-302.に基づき作成)

- 問 1** (1) 資料 I の下線部㉔と㉕に関して、ファインバーグの二つの論点はどちらも、心理的利己主義が正しいと考えるときにひとが犯しがちな誤りを指摘しようとするものである。それぞれの論点の内容をまとめなさい。
- (2) 資料 I の著者にしたがうと、心理的利己主義とその否定の立場（利他主義）はどのような説として特徴づけるのが適切か。二つの立場の主張をそれぞれ一文で表しなさい。
- 問 2** (1) もし援助行為が利他的動機によっても生じるならば、資料 II の実験で、4つのパターンにおける援助行為の選択割合のあいだには、どのような違いが生じる（あるいは生じない）と予測されるか。予測される関係（複数個あげてよい）をその理由もあわせて答えなさい。
- (2) 資料 II の図 1 から読みとれる結果をまとめ、(1) の予測との関連性のもとに論じなさい。
- 問 3** 資料 I および資料 II の内容をふまえると、私たちのあいだで援助行為がおこなわれやすくするためには、どのような社会・環境づくりや個人の心がけが有効だと考えられるだろうか。あなたが考えたものの中から一つあげ、有効であると考えられる理由もあわせて述べなさい。なお解答は、資料 I と資料 II のいずれの内容に基づくものであっても、また利己主義・利他主義のどちらの立場によるものであっても構わない。